

津田昇平教話 第二五話

令和三年一月二五日 朝の教話

親は親らしゅう、子は子らしゅう、何事も

らしゅうせよ。

おはようございます。令和三年一月二十五日の朝をお迎えさせて頂きました。

教祖様のご理解に、

人間は人間らしくすればよい。何も求めて不思議なことをしなくてもよい。

一理Ⅱ 佐藤範雄 さとうのりお 一〇二

とごうご理解がございますね。これの言わんとするところは、人間というものは、自分の力で生きるという事はできなくて、もうただただ神様

のお世話になって、ご厄介やっかいになって、初めて存在することができるし、生かされることができるとし、だから生きることがもできる。お天道様てんとうが照らし下さり、雨が降り、水や空気があり、土があり、農作物があり、息の差し引き、血の巡り、手足の動き、何から何まで全部、天地金乃神様てんちかねのかみ、天地の働きというものが、大天地小天地だいてんちしょうてんち、自分の命も含めて、自分の命の中も外も貫かれてあるということ。そのお働きがあるから、人間は今、生きることができ、御霊みたまとしても生きることができるとし、それがなければ、一時も生きることはできないし、御霊も、ただただもう、暗闇くみやみの中で立ち行かない。いやいや、そもそも御霊すら存在しないでしょうね。そういうことやと思います。だから、そこをよく分かれば、我が力で生きよう

という考え方というのは、いかに愚かな生き方であるかということが分かってくる。

人間は人間らしく、自分の身の丈、身のほどをよく理解して、神様と共に、お縫りしながら、「どうか神様、お側にいて下さい。お力添え下さい。おかげを下さい、お恵み下さい。いつも下さってありがとうございます。」と申します。こっからもよろしくお願いいたします。「至らなければかりで相済みません。申し訳ございません。改まらせて下さい、お願いいたします。」。

こうやって、お礼、お詫び、お願いをしながら生きていくということが、少しでも、生きている間に信心のお稽古に取り組んで、少しでもお育てを頂き、神様の子である人間は、成長すれば神になるはず。蛙の子

は蛙になるし、おたまじゃくしも大きくなれば蛙になるし、青虫だって蝶ちりめんになるし、人間は神様の子やから、信心させて頂いたら神になる。それが道理ていりやから、生きている間に、我情がじやうがよ我欲を放して、神様の御心みこころにならうように、お稽古して、そして生きてる間に神になってくれよ、そういうおかげ頂いてくれよ。人間らしく生きてたらそれでいい、とらうことです。ね。これがまあ、人間らしくすねばいらうこと。要するよじ、信心したらいいということになるたですけねむせ。

似たような教えがありますね、

親は親らしゅう、子は子らしゅう、何事もらしゅうせ

よ。

「理Ⅰ
中村 弥吉 なかむらやきち 二」

っていうみ教えがあるんですね。親は親らしゅう、子は子らしゅう、何事もらしゅうせよ。究極的に言ったら、「人間は人間らしゅうせよ」「っていうことですから、これをまあ、具体例として書いて仰ってるんですね。

これ別に、親子だけの話やなくて、そうですね、職場であれば、上司であれば、「上司は上司らしゅうせよ」「でいいでしょう。部下なら、「部下らしゅうせよ」「でいいでしょう。習い事をしてるじや、バレーを習って

たら、じゃあバレエの先生を自分がやってるんであれば、バレエの先生らしゅうせんといかんし、バレエの生徒さんであれば、自分が生徒らしゅうせんといかん。「何事もらしゅうする」ということは、これは自分が役割を神様から頂いているということですね。

そもそも、この世に生まれてきたっていうことは、人間ですから人間らしゅうせんといかん。これ、人間というお役を一つ頂いてますね。また、男性か女性かという性別も持って生まれるということを考えてら、生まれながらにして、男性という、あるいは女性という役柄やくばもありますね。自分が生まれるということとは、子としてまず生まれるわけですから、じゃあ、子どもとしてのお役も頂いてますね。まずはそのあたりからス

スタートするでしょう。でも大きくなっていくと、幼稚園小学校とかに行くけど、あるいは中学生になってきたら、クラブ活動が始まったり、そうすると、例えば吹奏楽部に入ったと。入ったら入ったで、その吹奏楽部の部員という役割がありますね。じゃあこの役割を頂いたら、これ様から一つ頂いてるんや、というこじになるんです。そうすると、例えば、みんなで集まって、どいどい中学校に行きましよう、練習に行きましようって話になった時に、らしゅうせんかったらどいなるかって言ったら、時間なんて関係ないわっていうことになるし、皆と一緒になんてする気もないし、ってことになるんでしょうね。で、顧問の先生が教えて下さってるけど、「そんなん知らん、私は私のやり方でやる」ってなったら、こ

ね、らしゅうなってませんわね。じゃあ、みんなが集まって、違う他所よその学校に行き、その顧問の先生が特別に教えて下さった。「ああ誰たれ々くん、ここはこうした方がいいよ」って教えてくれた。謙虚けんきょに「ありがとう」って言います、教えてもらってよかったなあ」って、素直になればいいんですけど、「いや、私はこのやり方でやってんのに、何でそんなふうに変えられんといかんやろ。何やねんこのおっちゃん」と思ったら、いねもつ、らしゅうは言えませんかね。「らしゅうする」というのは、その頂いてるお役を、天地の道理てんちのりに沿って、その役割を果たしていく、責務を果たしていく、全うけんしていくということが、大事になってくるんですね。

命をお世話させて頂くということになっても、そうですね。まあ親であれ、あるいは犬や猫、あるいは植物、何でも命を預かって育てさせてもらう。育てるという意味において、みな親の役割を頂いてとしてもですよ、これ、親は親らしゅうしなかつたらどうなるかって言うたら、ま、当然放棄するでしょうね。役割を放棄するっていうことになってくる。「しんどいからやめた」「めんどくさいからやめた」ってなったら、預かっている命はどうなるかっていうと、そら枯れるでしょうね。大きくなって、子どもが大きくなってきて、親の言う通りに何でもかんでも従わせようってなってきたら、これ親としてどうなのかという問題が

出てくる。本来、天地の道理てんちどうりに沿って考えた時に、親というのは、どこまでも、子どもと一緒に育てさせて頂く、お育て頂くということが大事です。また、至りませんのでね、完璧かんぺきうちゅうこともないし、足りんながらでも、神様にただただお継すがりをしながら、できる精一杯をさせて頂いていく。大事なところを伝えさせてもらおう、愛情を注いでいく、それを伝えていく。これが大事になってくる。それを、「そんな格好やめてえや。もう、そんなふうにしてたらもう、周りからどない思われるか分からん。そんなん恥ずかしいからもうやめて」。何でもかんでも親の都合、あるいは親の面目めんぼくを保つためだけに、メンツのために、子どもを何でもかんでも従わせる。「あんたがもっと勉強していい学校に入ってくれたら、

お母さんは鼻が高いし、誰々さんたれたれのところはあんな良い学校に行ってるのに、あんたはこんな所になってるんやったら、もう情けない」って。「あんだがもっとしっかり勉強したら良かったのに」って、こないなってきたら、子どものためを思ってるというよりは、親のエゴのようなところが出てきますね。これ、親らしゅうなってるかってなると、親らしゅうなっていないですよ。謙虚けんきょさがないし、思い違いしてるし、たとえば親と子と言いましても、違う人間ですし、違う生き物で、違う生命体ですから、それぞれ尊重せんといかんところがある。だから、親が親らしゅうならんと、子どもというのは育たんし。

でも今度ね、子どもは子どもで、何でもかんでも、「はい」「はい」「はい

っかり聞いてると、これはこれでまた難しいでしょうなあ。なーんでもかーんでも親の言う通りにだけ、ただただひたすらしてるようじゃ、そういう命やったら、これはこれでもう自分の意思がなくて、たましいも悲鳴あげるでしょうね。そうならざるを得ないような親が存在したとしても、どこかでたましいは悲鳴をあげるから、やっぱりどこかで、親は親であろうとも、子が子らしゅうならんと。例えば、親の難儀なんぎが変わっていかない場合でも、子どもが子どもらしくきちんと正しく道を歩むことによって、誤った親の行動、言動、心得こころえ違いというものに、親も気付かせて頂いて、改まりを願っていくことができます。

そう思うと、子どもが子どもらしくあるということが、親が成長する

ことになるし、親が親らしくするというのが、子どもが子どもらしくなるということになる。上司が、もう自分の責任を放棄したいし、問題が起こって、ややこしいことはかなわんから、何でもかんでも困ったことがあったら部下に押しつけて自分は早く帰る。自分は知らぬ存ぜぬ。全部、部下がやったことや。いざ何かあった時に守ってもくれない。部下にとったらね、散々こき使っただけこき使って、いざとなったら何のお世話もしてくれない、守ってもくれない。これになったら、上司としてほんとにどうなんか、上司というお役を頂いてるのにこれどうなんか、ってなってくる。

神様から頂いてるお役というのは、できるから頂いてるのではなくて、できないのを分かった上で、信心したらできるようになるよという願いの中で、お役を頂いてるんですね。それがまあ、親にならして頂くんでもそうだし、新しく就職はできて、この職場でお仕事をさせて頂くという、そういう役割があってもそうですね。夫としてのお役、あるいは、おじちゃんおばあちゃんとしてのお役でも一緒ですね。お役を頂くということは、その役柄やくがらに奉仕していく。それは、簡単なことじゃないですよ。あんな難しいことだね。弁わきえんといかんということになってくるし。で、これ、自分の力で何でもしようと思つと無理が出てくるんですよ。人間らしくしようと思つて、我が力でやろうと思つたら無理が

出る。だから、親は親らしゅう、子は子らしゅう、それぞれ神様におすが継りしながら、今頂いてるお役に取組んでいかないと、ほんとにこう、親なのに親らしくない、子なのに子らしくない、上司なのに上司らしくない、部下なのに部下らしくない、夫なのに夫らしくない、妻なのに妻らしくない、らしくないことが起る。つまり、天地の道理てんち どうりから外れてしまふと、いよいよ、必ず難儀なんぎが出てきますね。「何事もらしゅうせよ」って仰ってますでしょ。何事も、なんです。要するといつて、責務せむを全うしなさいってことなんです。で、その頂いてるお役の中で、たましいを磨みがきなさいってことを仰ってるんです。

新しいお役を頂くという事は、「その中でしっかりと信心して育て

くれよ」という願いが込められてますね。共に育ててもらいたい、と。親と子であればね。親にならして頂いたんやったら、親として、子と一緒に育ててもらいたい。そのためには、自分は至らんということが分かっているんであれば、ただただ神様に謙虚けんきょに、お参り、お取次とりつぎも頂きながら、教え導いて頂きながら、足りないところを足して頂きながら、時に足りないところを、子どもを通じて教えて頂き、その中で改まらせて頂いていく。それは、親として大事なことですな。

子は子らしゅう、自分の力でもちろん生きてるわけでもない、教えて頂く、育てて下さる、祈ってくれる、であれば、偉そうにもものを言うたりすることも本当は違ついでしゅうな。ただ謙虚に「ありがとうございます」

聞くべきところは素直に聞かせて頂くといい、その謙虚さもやっぱり大事になってくるでしょう。でも、親の顔色ばかり伺ってるようじゃ、こら子らしゅうなりませんね。自分の意思、自分の考えを大切にしていくな。これも、神様を大事にしなごら、子らしゅう生きていくなということはこれ、すぐく大事になってくる。

神様から頂いたお役は、信心していくと、ありがたなおかげになってくるんです。これ信心がないと、頂いたお役に奉仕する^{まじ}ことも、全^{まじ}うする^{まじ}こともできずに、むしろ、頂いたお役に押し潰^{つぶ}されるということになりますね。たとえ傍^{はた}から見たら、「ええですなあ、結構なお役ですなあ」

と思っても、でも、信心させて頂かないと、押し潰されるといふことがある。せつかく頂いた新しいお役も、それ自体、本当は信心しつかりさせてもらったらありがたいことになるのに、ありがたいおかげになるのに、自分がしつかり信心してないから、つまり人間らしくしてないから、我が力で何でもかんでもしようとして、謙虚けんきよさもない、感謝もない、お詫わびもない。「救い助けて下さい、お育て下さい」「っていうお願いもない。つまりこれ、信心。人間らしくない。もうそうになると、せつかくそのお役を通じて、育ててやろう、そして、お前もお育て頂く、子もお育て頂く。共に助かる。共に育ててやろう。たましいを磨みがいてやろう。死ぬ時に万歳三唱ばんざいさんしやうで「結構な人生でした、ありがとうございます」って、そう

なるために、次第に踏み広げていくために、道を。そのために今、このお役を授けるから、そのお役を通じてお育て頂きなさいよ、ということがありますね。大きく考えたらもう、親と子というだけじゃない、国民という形で考えがあったり、世界の、この地球に生きる人間として、ってお役もあるかもしれませんね。いくらでも広がることはあると思います。

「力不足」なんて言葉がありますけどね、頂いてるお役というのは、足りるから頂いているとは思わん方がいいと思いますね。子を授かるって言うても、自分にそれができるから、その能力はあるから、こんなお役頂いたんやとは単純に思わんことですよね。元々力不足なんやと思うとして下さい。私はそのように思わせて頂いてますし、でも、しっかりと

神様を離さずお縋すがりさせてもらったら、その頂いたお役を通じてお育てを頂くし、ありがたいおかげになるんだということ。だから信心してなかったら、そのお役というのはなかなか難しいですよ。一生懸命いっしょうけんめいなんですけどね。一生懸命やけれども、どこか大きなところで、落とし穴があったり、抜けてたりすることがある。足りてるから役を与えられてるんじゃないくてね、本当に、新しくお役を頂いたら、ま、全てそれは自分にとって荷が重かったりするんですけども、そこを信心させてもらったら成長させて頂ける、ということですね。

信心したら、できるよつになるよつなおかげを頂いてるはずなんです、お役はね。最初からできるんじゃない、信心してお育て頂いたら、そし

たら、だんだんらしゅうなってるんですよ。最初から、いい親になろうと思ってもできるもんじゃありませんね。そうありがたいは思っても、願ってやるものの、ああでもない、こうでもない、イライラしたり、腹が立ったり、もういいわと思ったり、申し訳なく思ったり、かわいいと思ったり、また腹が立ったり。ま、そういう中で、自分は親としてどうなんやろ、胸に手を当てたら、じゃあ自分は子としてどうなんやろって思ったり、や、こねじゃいかな、相^あ濟^いまんなあと思ったり、またそこで信心して、「どうぞ親らしゅうならして下さい」、つまり良い親、良い子、良い夫、良い妻、良いおじいちゃんおばあちゃん、良い上司、良い部下にならして頂きますようにというふうにして、頂いてるお役が、てんち天地

の道理しんりに沿って、神様の御心みこころにかなうようなお役になるように、果たせるように、お願いして稽古けいこさせてもらうんです。そんな中で、こちらも成長するし、実はそれで自分も救って頂くんですね。そこが大事なところですよね。

お役が多くなればなるほどね、当然、それだけ責任も重くなりますよね。だって責任が多くなるとるんですから、重いですよ、やっぱり。重いから自分でそれを背負っていいことと思ってね、まあ潰つぶされますわね。だからもう、ただただもう、お役が多くなればなるほど、ひたすら神様に継るしかないと思うんですよね。

四代金光様が、「役柄やくがらに奉仕する」ってことを仰おほってね。自分が教主きょうしゅ

というお役を頂いておられて、これも、できるからするというよりは、この役割を神様から頂いたから、その役割に合うような自分に、奉仕させて頂くという心で、その役柄に合うような自分に、足りてるというわけじゃなくて、足りなくてもその頂いてるお役を全うまっくできるよって、お願いして、稽古けいこをして、修行して、その中で自分自身が成長させて頂く、ということですよ。そういったことはやっぱり仰る。そこで信心が必要だね。神様と共に、お育てを願っていく。これが大事ですよ。

要するところ、「親は親らしゅう、子は子らしゅう、もっと言うところ、

「人間は人間らしゅう」というのは、まあ結局のところ、自分の力で何

でもしようとしたらあかんよ、いうことなんです。どんなお役を頂いてもですよ、頂いてるお役って、あるじゃないですか、その時その場に行けば、何かお役ありますよ、生きてたらね。じゃそのお役を全うするんでも、ほんとにお継りすがして、神様にお力添えちからぞ頂いて、お継りすがしながら、お役を果たさせてもらう。

会社にも毎日行かんかったらクビになりますしね。じゃあ、生活が成り立たんようになるかもしれないもんね。そう考えたら、毎朝きちんと朝起きて、目が覚めて会社にいくことが出来るってこういうことだって、これすごい大事なことでしょ。相手先と商談があっても、寝坊したり遅れたりがしょっちゅうやったら、こんなもつどうにもなりませんでし

よ。やっぱり頂いてるお役がある。会社の中でもお役がある。じゃあその日に、きちんと朝起きて、調べるのと調べて、行けるとこまで行って、ちゃんと話し合いができて、仕事を無事に終えることができた。で、ここまで、ほんとにそんな時そんな時、神様をお願いして、目覚めさせてもらい、神様にお継りして、会社に行かせてもらい、神様をお願いしてまた出先に行き、そこで神様をお願いして商談があり、終わったら神様にお礼申し上げ、そうやって何でも、頂いたお役を果たそうと思ったら、神様にお継りをしながらさせてもらっていきましょう、というじよ。ま、いろいろことを仰ってるんですね。そんな中で、責任を負うというじよは、時にしんどいじよもあるんですけどね、神様にお継りをさせて頂いて、

責任持って目の前のお役に取り組ませて頂く。一生懸命取り組ませても
らったらね、そしたらたましいを磨く^{みが}ことができ、人間としても成長
させて頂ける。それを、神様は願って下さっているということですね。

考えてみたら、「わが身わが一家を練習帳にして」って仰ってるのも、
要するところはこういうことなんですよね。夫が外で仕事をする。妻が
家で家事をする。例えば、そうであったとしてもね、夫は夫らしゅう、妻
は妻らしゅう、子は子らしゅう、それぞれ、頂いてるお役が今あるわけ
ですからね。そこを神様と一緒に、今日一日を、わが身わが一家を練習
帳にして、頂いてるお役を練習帳にして、その中で信心させてもらおう、

神様神様言いながら過こさせてもらう。お礼申し、お詫わび申し、お継すがりし、そして人間として当たり前の生き方をしていく。「そうやって成長してくれよ、育そだってくれよ、助たすかってくれよ」と願ねがって下さくださってるってことですね。ま、要いするところ、「日ひに日ひに生きるが信心なり」ということだし、それが人間らしく生きるということであり、親は親らしゅう、子は子らしゅう、何事なにこともらしゅうせよ。頂たかいてるお役やくが、ほんとにいう、果たせるように、果たせる自分であると思わずに、果たせるような自分じゃないけれども、お継つぎりしながら、神様にお力ちから添そえ頂きながら、役割に奉仕ほうしさせてもらう。その中で、たまたましいをしっかりと、本心ほんしんの玉たま、玉たまを磨みがいてくれ、とお願いですな。

今日は今日で、新しい一日を頂いております。この、今日は今日の分母でしかできませんけど、今日の分母で、神様と一緒に、頂いてるお役を通じてお育て頂けるように、たましいを磨くみが稽古けいこを今日一日、させて頂くことができたかな、と思います。ご祈念きねんさせて頂きます。

どうぞおかげ頂いて下さい。よくお参りでした。

（了）



津田昇平教話 第二五話

令和三年一月二五日 朝の教話

令和五年九月二十日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇一〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三一七一五
